



外国文献紹介

脊髄髄質部の転移性腫瘍に対する外科的治療

Strickland BA et al : The surgical treatment of metastatic spine tumors within the intramedullary compartment. J Neurosurg Spine 28 : 79-87, 2018

筆者らは脊髄髄質部の転移性腫瘍（IM）で外科的治療を実施した13例に後向き調査を行い、転帰などについて検討した。原発巣は腎細胞癌4例、乳癌3例、黒色腫2例などであった。脊髄の機能評価にはFrankel分類を用いたが、グレードDが12例、グレードCが1例であった。術前の画像評価にはCTとMRIが、術後評価にはMRIが用いられた。その結果、術後の画像評価で腫瘍の残存なしと診断された9例中3例（33%）に、その後局所再発が認められた。また、術後早期に機能評価がグレードCに悪化したものが6例みられたが、2カ月後の時点では、術後血腫を生じた1例がグレードA、グレードCが2例、グレードDが9例であった。グレードEに改善したのも1例認められた。術後の生存期間の中央値は6.5カ月で、3例は執筆時点で生存中であった。そして、IMの患者において外科的治療は神経機能を維持するうえで最後の手段であり、今回の検討から、IMに対する外科的治療は、比較的機能障害は軽いが進行傾向を示す症例において、脊髄機能の低下を防ぐうえで有用と思われると述べている。

瀬戸一彦